

A434

沼尻絰一郎編輯全二冊

# 西南太平記

東京

萬笈閣發兌

二月廿五日陸軍一般へ左の通り達せられ

今般征討總督本營と大坂へ被置二品親王有柄川

熾仁を総督不陸軍中將山縣有朋海軍中將川村純

義と參軍不彼任候旨電報有之候條為心得此旨相

達候事

陸軍中將鳥尾小彌太 行在所所屬軍人取扱被仰

付候旨電報有之候條為心得此旨相達候事

明治十年

陸軍卿代理  
大山陸軍少輔

48-7784

海軍中將河村純義

參謀野津少將

參謀三好少將



有栖川敏親王

陸軍卿山縣有朋

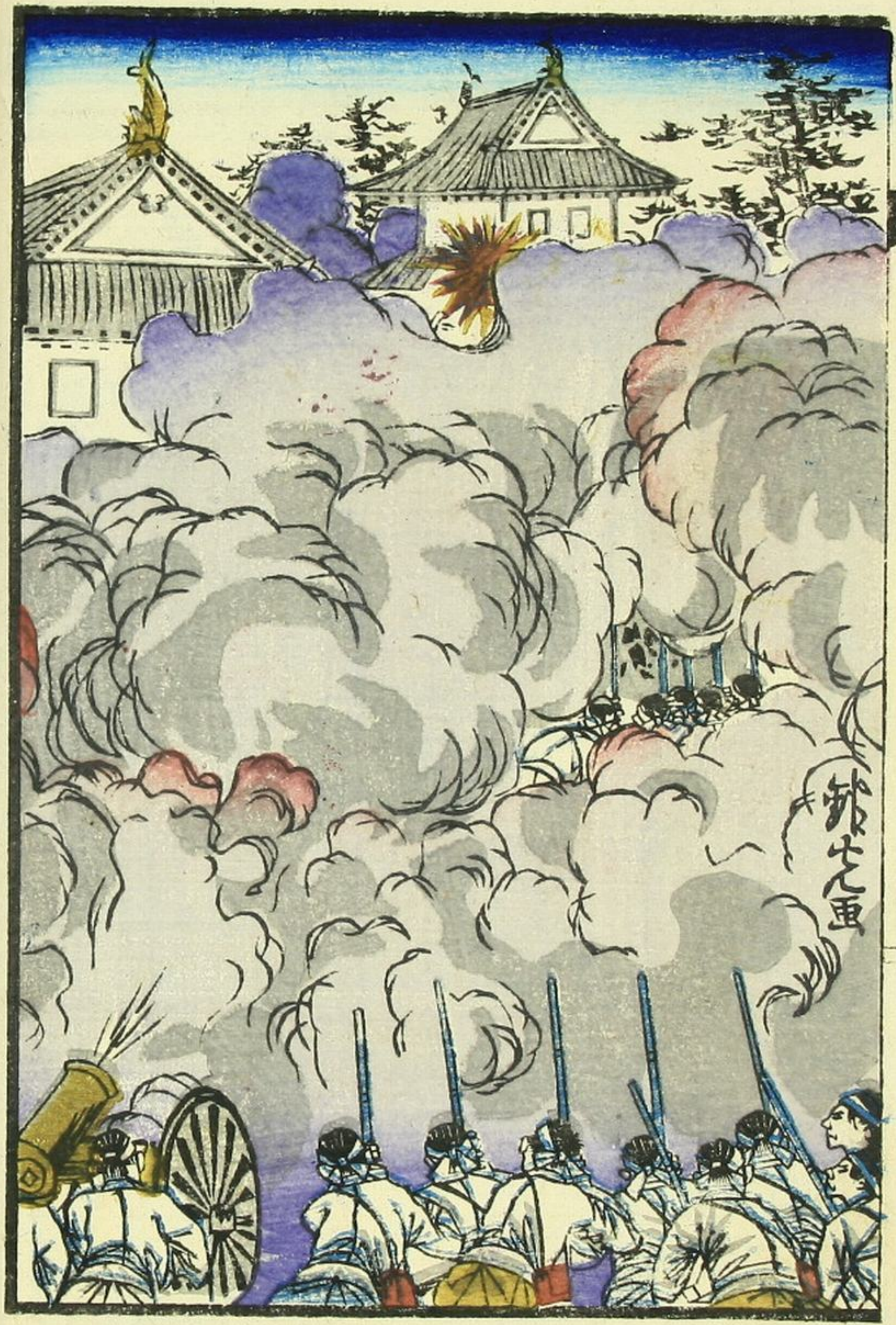


新七画



西南太平記

二編上



西南太平記

三



西南太平記二編卷之上

東京 沼尻絰一郎編輯

第三回

賊軍再び熊本城へ進撃  
 并郷隆盛川尻へ發向

方今朝家の政令一つも道理ふ背けるりの  
 なし何ぞ不平と鳴らす頑固黨の激動騷  
 擾さりと確乎として瞭然たるも鹿兒嶋  
 縣下今や一圓天下の大變ふりころるゝ赴き残

めつと 縣官を暴殺せらるが如きハ大丈夫の  
耻るところありんや既ハ沸騰潜行して暴徒  
ハ肥後路ふりて 諸も賊軍二月二十二日午  
前五時より再び熊本城と四方より攻寄せ  
きとて 賊將篠原國幹を一隊と率ゐる安  
政橋を渡り坪井町へ向けて押出し来るを  
官軍も邀へ戦ふるどあそあれ城中よりハ  
賊の中軍へむけり散弾と乱発せらるるは

宛然雨の降るが如くありて 賊軍も堪  
兼たりけん散乱せら折々高橋より上陸  
せし官軍ハ直よ花岡山ハ登り賊軍を目下  
み見下し城中の隊兵と挟んで打立ければ  
賊軍終ふ防ぎ得ず四途路ふるつて敗走せ  
りと又熊本の西南より本郷口みてハ餘程  
激しき戦ひありて 賊軍ハ終よ敗れ死  
するとの三十人餘あり北の口千段畑京町

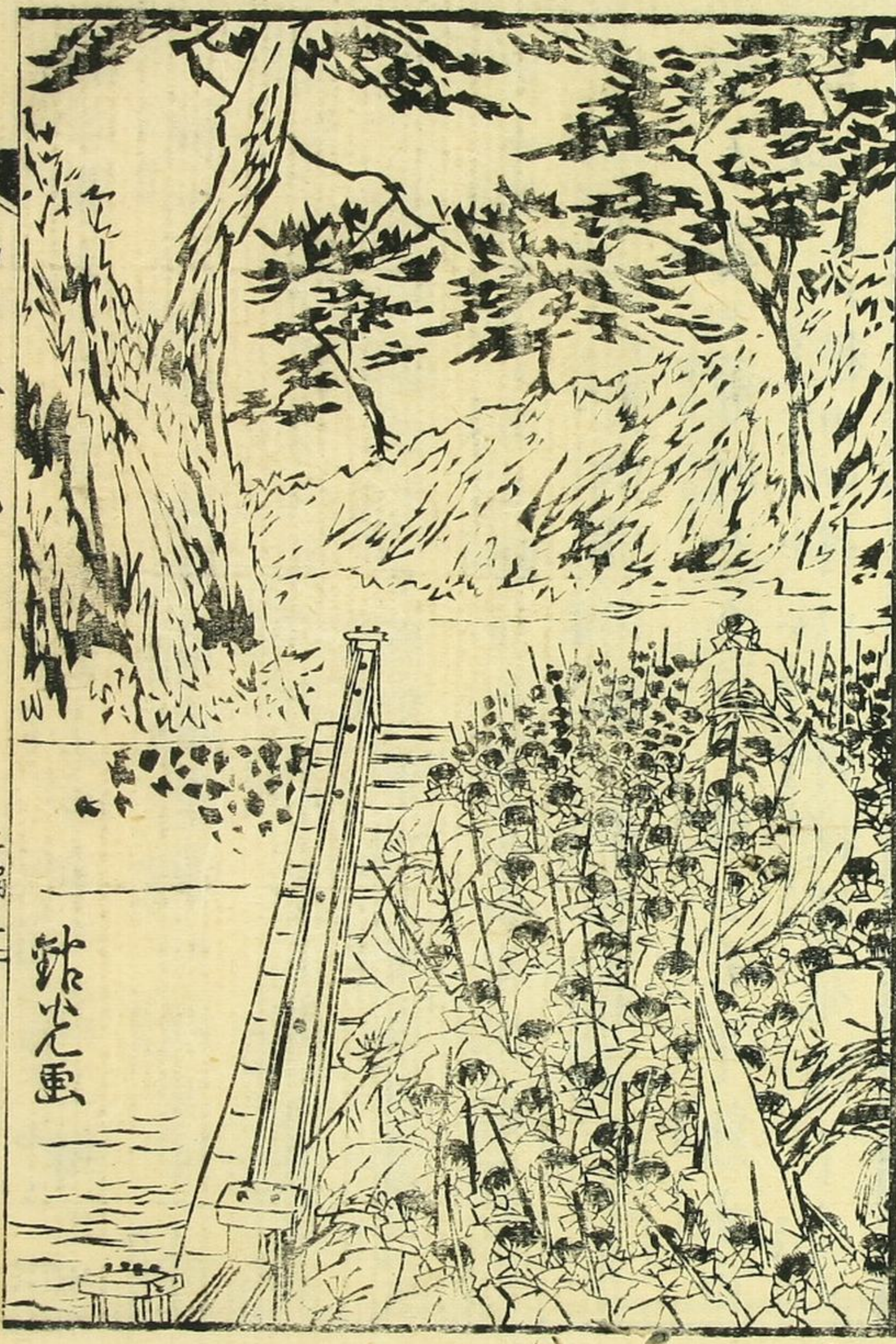
の方みくも激戦あり一ヶ賊軍と何れも利  
 と失ひ官軍の勝利あり賊軍の死傷も亦よ  
 ぶそのの三四人午後三時ふりつらて戦ひ一  
 先休戦とあり一ヶ賊軍を再び午後五時を  
 ぎより三四十人程植木驛へ押し出すこの時  
 福岡分営の鎮臺兵の木の葉町ふりて其  
 先隊を既ぬ植木町より繰り込め居たれを  
 まるや賊軍押寄せると聞くより早く後

陣へ此事と報知し片時も猶豫せず午後六  
 時過ぎ賊徒を植木町の先へ迎へ戦ひつら  
 みぞ賊徒の方みくも戦ひの始まるを聞き  
 後ろより續きさく先陣ふ力と合せんと繰り  
 込を来るその勢僅らふ三百人許りありつらと  
 互ふ勝敗と分たす夜ふ入り官軍植木町を焼  
 きなつらひ番兵と置きさく本隊と高瀬ふ据た  
 り此戦ひは官軍傷と負ひつらりの六人あり

續く賊徒を高瀬の方へ進む模様ありけれ  
 ば官軍再び進撃の用意せりと蓋し此ふ  
 あらむ之と考ふるふ官軍を七分の勝利あ  
 りとりども現ふ籠城の姿あるを鎮臺將校  
 が始とありて其の路ふ之と拒まむして故らふ  
 敵を城下ふ引寄せ他の軍の来つゝその前後  
 より挾撃するの策計と設けられたるハ豫  
 卜め前号ふ記しあり如く彼有名なる天主

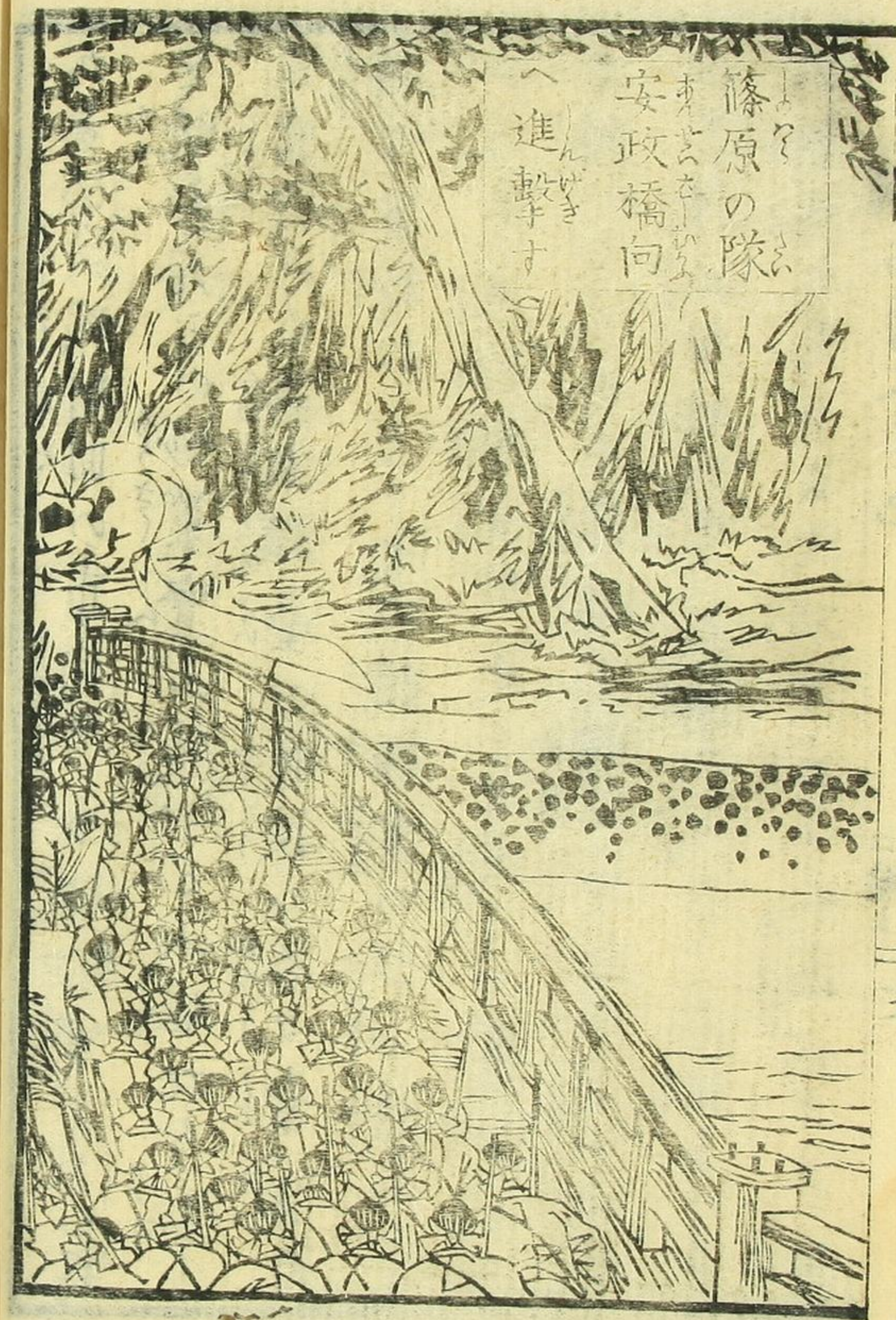
かよび該城周囲の市街半も皆官軍よりこれ  
 と焼きたるの妙策實ふ感ずるふ堪たり而  
 て當時その熊本鎮臺の將校ハ各々當世の  
 頗る英雄にしてその指揮官ハ谷少將あり  
 此人を高知縣士族ふして久しく豪勇と以  
 て聞へたりその參謀を樺山中佐兒玉少佐等  
 ふり樺山中佐ハ鹿兒島の人たりと雖もつ  
 に朝廷の爲め大功と立るの志あり今





跡光重

藤原の隊  
 安政橋向  
 進撃す



般の事あるや書と在東京の友人某は贈て曰  
く縦令は西郷が桐野篠原を率ひ数百万の強  
兵とりつゝするも何ぞ恐るゝ不足ん熊本鎮  
臺の吾輩當ふ之を固守すべし幸ひ不意と勞  
まろ勿きと其人物たるをみる不足るへし又  
兒玉少佐は長州徳山第一等の豪雄ふしと  
曾々屢々勇膽をのりつゝ顯る去年熊本  
事件の種田少将以下將校皆死傷し兒玉

少佐獨り辛くその身と全うせり而して  
野津少将は陸軍卿山縣氏に向ひ兒玉死せざ  
れば鎮臺の陥らずと語られたりと其英士  
たる斯くの如く之が加ふるに品川弥次郎  
も亦既小城中不在りて軍事と議せらるると  
まの人の長州の勤王士ありて高杉山縣木戸  
の諸公と久しく國事不粉骨と盡し屢々軍  
陣に臨み膽畧とりつゝ聞もと夫れ是等の

諸君が固守一指揮の術を尽し進退防禦  
 其方と失とざるふあての西郷桐野篠原等  
 百万の兵と率みく来り攻るも何ぞ容易く  
 此堅城と拔れ得ん況んや官軍の援兵既  
 着せりまゝと肥前長崎より東南に當る日見  
 峠の南方の海岸づきまゝ茂木浦といふ漁師  
 町へ鹿兒島の士族が銃器と携へ上陸せし事  
 兩三度ふふよび探偵人出張して事情と察る

不過日捕縛よりありたる同類のものありと久  
 留米あゝ此程縛ふ就たる六名へ佐賀山縣  
 滋賀三縣の脱走士族あゝ皆撒文と所持し  
 たるものなり定め各各地と潛行し觸れ  
 知らず為めあるとつこの輩の内は鹿兒嶋  
 の士族が多くその他官員中村兼知竹迫彌  
 市舊彦根藩大海原尚義大東義徹皆拘  
 引ふあり官員中村竹迫の二人は大山縣令の

説諭せつごと聞き入いりてその身みを官くわんふつきるぐら  
 不平ふへいと懐くわいき拘引こういんとありも逆徒ぎやくとあらんや大  
 東義徹とうぎてつ大海原おほうみづらみ尚義しやうぎの二人ふたりを西京さいきやうよあつと  
 市中しちゆう潜行せんかうし御所ごしよ近邊きんぺんと徘徊まいかい乃なり各おのづか撤文せつぶん  
 と所持しよじせし不審ふしんの筋すぢありと探索たんさくあり  
 一いち又また汽車きしやにに坂地さかちへ赴おもむくと七條しちじやう停車場ていしやうじやう  
 あり大海原おほうみづらみの探偵たんていのためと拘引こういんありし  
 と噂うわさくより大東おほとうへ東京とうきやうへ逃にげさりし一いちが赤坂あかざか辺へ

あり拘引こういんし就つき警視けいし第三課だいさんかへ差苗さしなあき  
 吟味ぎんみ中ちゆうふと外がい十餘じゆじゆ人も追々おひひ捕縛とくわくふ就つきけ  
 る斯くて鹿兒島かごしまの賊軍ぞくぐんへ別隊べつたいをりつと筑前ちくぜん筑後ちくご  
 へ操出そうしゆし同どう二十三日にじふにち曉あけき五時ごじより官軍くわんぐんへ陸海りくかい  
 共鹿兒島かごしまの舊城下きゆうじやうかへ一時いちじに進撃手しんげきしゆしたるふ  
 賊軍ぞくぐんへ却かへて長崎ながさき愛媛あひめの両縣下りやうけんかへ二道にだうより東ひがし  
 へ向むかう進軍しんぐんする模様もようありしを官軍くわんぐんへ同日どうじつ  
 夜よ入り十一時じふいちじごろより直なふ熊本くまもと廣島ひろしま及び



鎮守之重

城中ふ屢  
調練して  
敵の景況  
と窺ふ



近衛兵并み鎮臺兵の内一小隊づゝ進撃したる  
 ところ賊徒ハ皆繰り出したる後ハ其  
 進撃の際少く番兵等と戦ひ一のこめて  
 その本陣と乗り取りたりと又栗ヶ崎と秋月  
 其他一二ヶ所戦ひありて官軍方勝利なりと  
 猶東京府下にゝ第一後備軍召募の儀既  
 ふ布達より第二後備軍も何時召集する  
 やも計難けむ後命次第速う又達の地へ

馳集り遅滞せざるやうふとの布達あり又西  
 海へ回り一巡査も兵隊とありと陸軍省ふ  
 てハ看護兵九十餘名を招募せられ近々尚  
 三百名程招募さるゝより宇都宮あつて  
 佐倉の兩分官二大隊も昨今工兵教導團に  
 屯集せるが九州の電報次第繰出す手筈あり  
 て東京よりハ川路大警視が大島大警部并  
 み大山三上の三氏を率ゐ江口權少警視惣長

とあり警部十名巡查三百人を率わ同二十  
 六日出帆不あり同局より弾薬五十萬を車  
 百五十輛に積込東京新橋より汽車にて横  
 濱へ運び夫より西京へ廻され青山火薬庫等  
 よりも許多の弾薬を西京へ廻され陸軍省に  
 へ去る十七日より二十四日まふ凡そ金高  
 九十万圓餘仕拂りも當時陸軍中将西郷  
 從道へ逆將西郷隆盛の舎弟あり今般

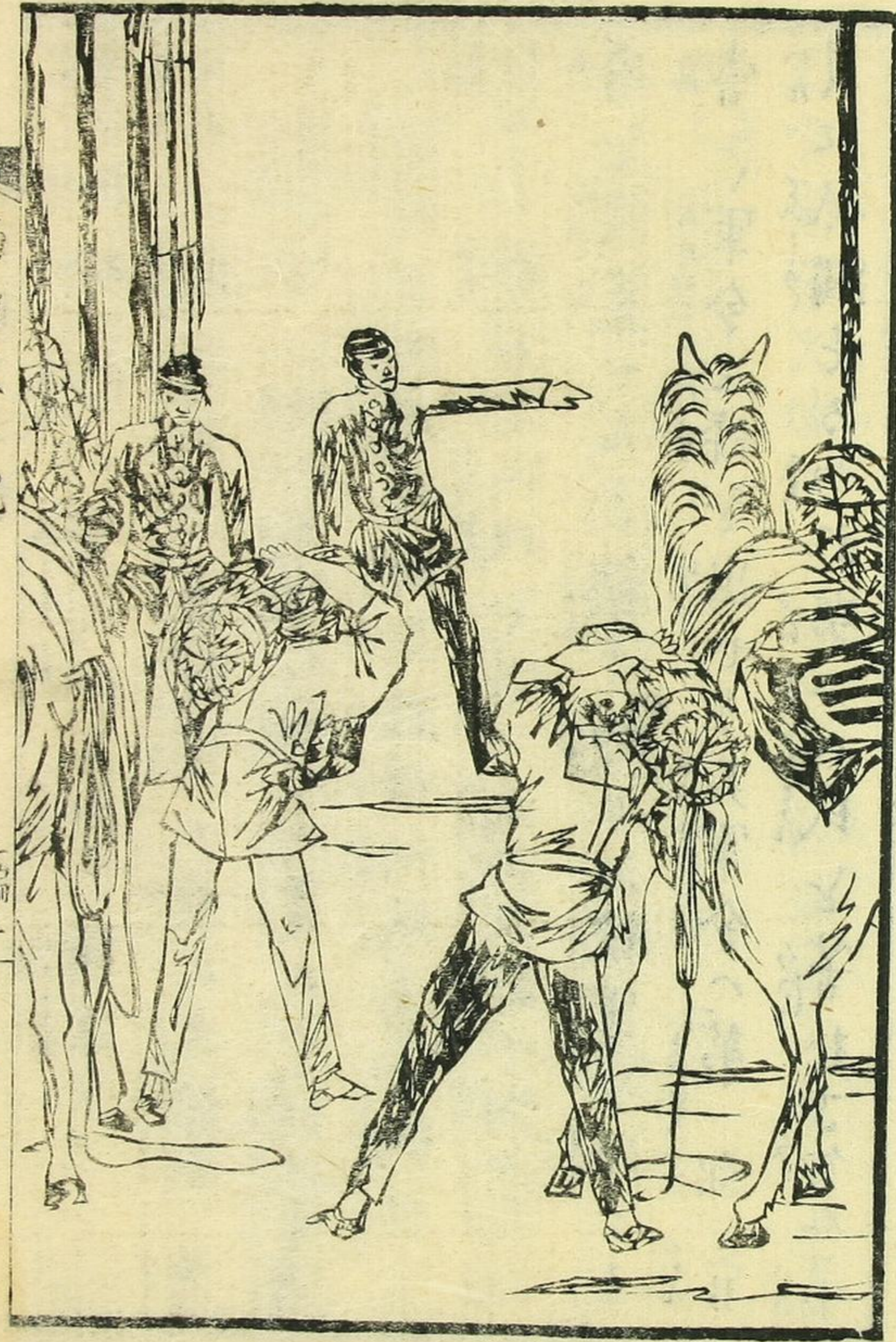
陸軍卿山縣氏の代理を命ぜられ既ふ西海  
 へも出発のところ方今代理中ゆゑ出発を命ぜ  
 られず曾我少將へ東京鎮臺司令長官を兼  
 務せられたり二月廿六日右大臣岩倉公より  
 布達ふりつとく  
 陸軍大将正三位西郷隆盛陸軍少将正五位  
 桐野利秋陸軍少将正五位篠原國幹官位  
 褫奪被仰出タル旨行在所ヨリ電報有之

候條此旨為心得相達候事

右之通り布達ニ相成り賊軍ハ西郷を始ト肥後川尻へ本陣と居へ愈々大軍と率ゐ本陣へ操込と川尻より諸方へ出陣あり手筈とるせしよし斯く鹿兒島暴徒の第一隊の大將ハ篠原国幹第二隊の大將ハ西郷隆盛副將として村田新八第三隊の大將ハ池上四郎第四隊の大將ハ桐野利秋第五隊の大將ハ長山英淵邊高照等

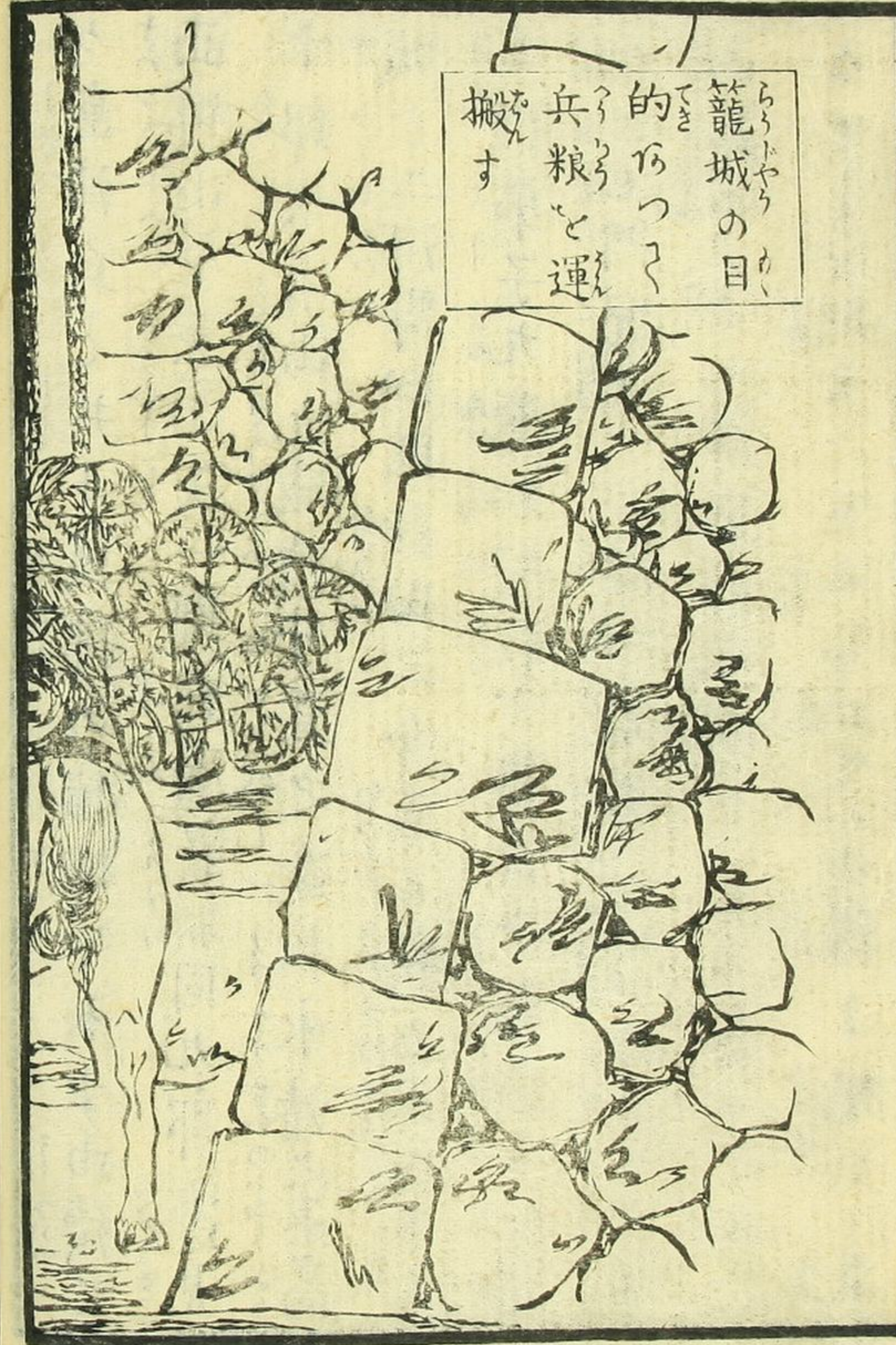
が島津氏と共ニ後陣の指揮とるす由續て西郷小平永山矢一郎別府新助同九郎邊見十郎太永山九成浅井直之進松永清之丞高城十二河野四郎村田三介市本勘介山内半左工門弟子丸應助野村十郎太中島武彦肥後助右工門兎玉ハ之進伊東直二山口小右工門平山新介等が諸軍の隊長とあり各々指揮とるせしが則ち二百人と以て一小隊ニ編成一其





西の門

編上



籠城の目  
的のつ  
兵糧と運  
搬す

西の門

編上

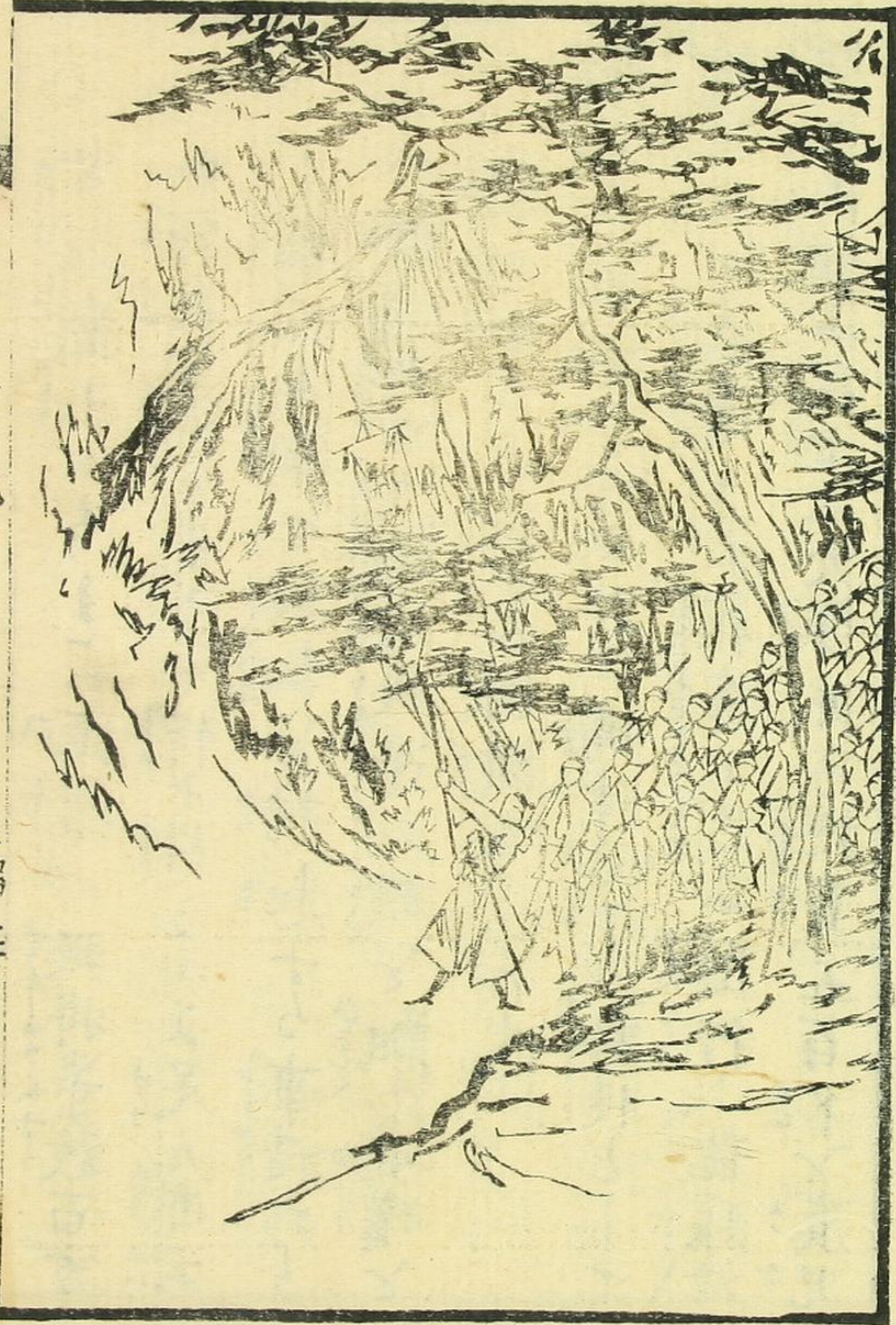
兵の打扮ハ尺ノく莫大小又白き脚半ありて総  
 大将西郷隆盛ヲ舊陸軍大将の大禮服と着  
 一美々しく粧ひ中陣の備へ大書みく新政厚徳  
 と印たる大旗と押立肥後川尻より出張し  
 白く務めて仁政と唱へ九州に於て別又良政  
 府と設置せんと稱し頻りに結軍を励まし  
 嘗て軍令三條を出せり其軍令へ第一都て官  
 員に抵觸する勿れ第二人民と苦むる勿れ第

三官宅を火焼する勿れと其軍勢へ凡一万四  
 五人あり

編者云く逆將西郷隆盛ハ漢の韓信の如  
 く大畧名計の著るるや維新の初戊辰の  
 際小王室の中興を謀り伏見鳥羽與羽函  
 館等の彈丸雨注の下と括り幕府と擯覆  
 して將校を昇り執政の一ふかり元帥の棟  
 梁たり既又熊本城を向て激戦行るも韓

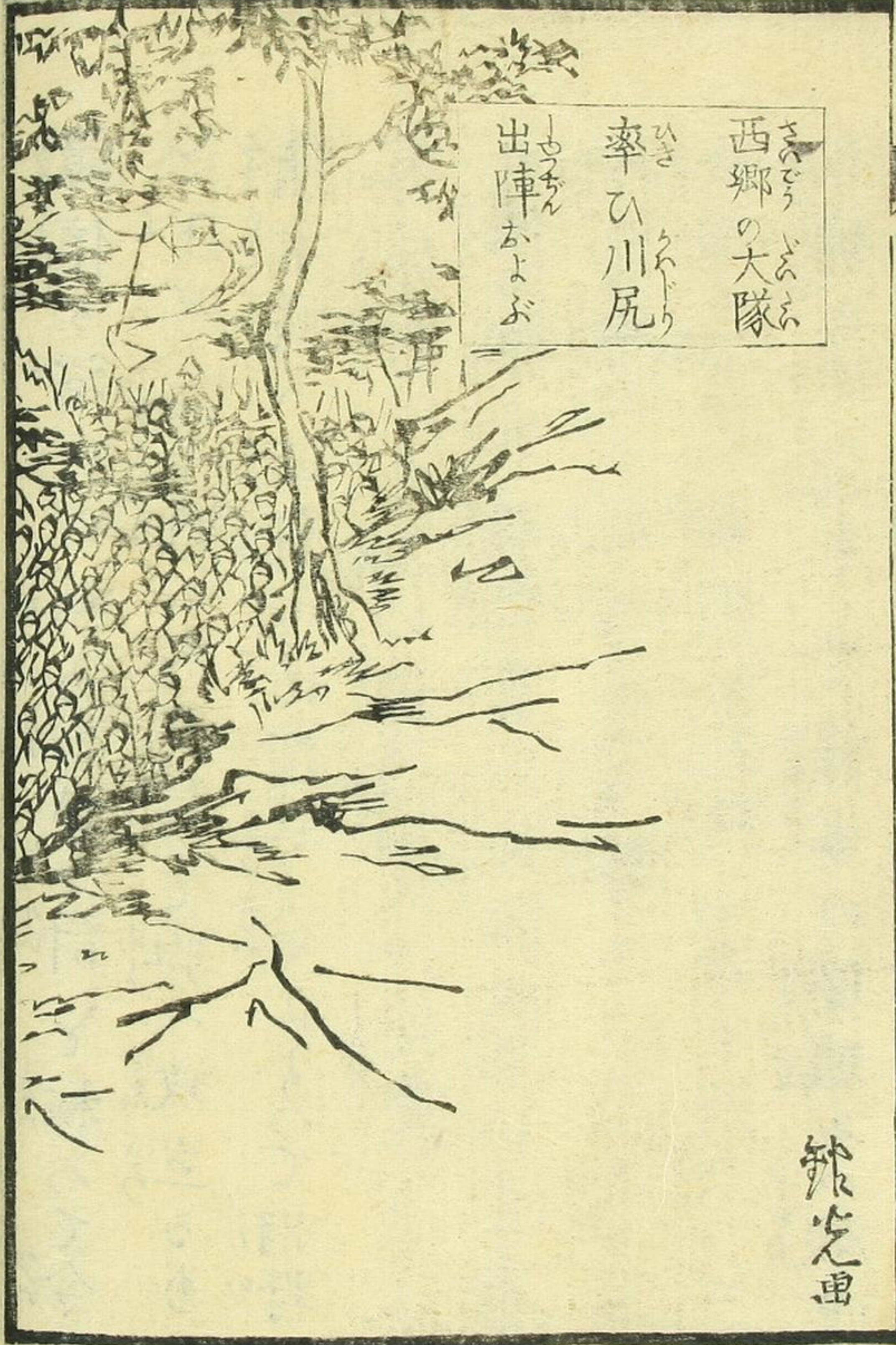
信楚の河内城と取囲そく昼夜之ふ攻入  
 らんとつんども司馬印を緊しく守りて  
 一人も出逢ねば有敷ふ諱信も詮方なく  
 諸將ふ向ひひと言けりやう我此城を囲むと  
 己ふ数十日よ及べども敵一向ふ出逢を只  
 堅く守る而已みそ一度も戦を交ドへず  
 其上要害堅固るるも急急よ之と攻伐  
 時へ士卒の損傷多りりべいと漢の元帥

諱信が河内の城ふ向ひ一計と極めて令  
 と下ご軍將四人ふ兵と與へ攻立るも  
 熊本城ふ西郷の指揮号令よあつて桐野  
 篠原村田池上の逆將四人が進敷手なせ  
 漢の柴武周勃盧縮斬歙の諸將が司馬  
 印の籠城ふ攻立るも髪髯たりし虽ども  
 西郷へ戊辰年間の西郷ふあらば叛徒の  
 巨魁の西郷ふして熊本の堅城ふ頗る



西郷の大隊

二編上三十九



西郷の大隊  
率ひ川尻  
出陣

西郷の大言

錦光画

英雄勤王<sup>あゝゆうきんこう</sup>のあまき<sup>あまき</sup>に<sup>に</sup>匪謀<sup>ひぼう</sup>の叛将<sup>はんしやう</sup>等<sup>ら</sup>数百万<sup>ひゃくまんご</sup>の強兵<sup>かうへい</sup>と以て<sup>も</sup>まるも<sup>も</sup>何ぞ<sup>なんぞ</sup>恐る<sup>おそ</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>足ん<sup>たり</sup>亦云<sup>またいひ</sup>く韓信<sup>かんしん</sup>も<sup>も</sup>奉て<sup>たて</sup>國乱<sup>こくらん</sup>と<sup>と</sup>攪起<sup>かうき</sup>する<sup>る</sup>事情<sup>じやうけい</sup>の<sup>の</sup>倭漢<sup>わかん</sup>共に<sup>とも</sup>大元帥<sup>だげんすい</sup>叛逆<sup>はんぎやく</sup>の旗<sup>はた</sup>と<sup>と</sup>飄<sup>ひるぶ</sup>威權<sup>ゐけん</sup>と<sup>と</sup>掌握<sup>しやうあく</sup>せん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>欲<sup>あり</sup>する<sup>る</sup>國賊<sup>こくぞく</sup>あら<sup>ん</sup>や

斯<sup>かく</sup>て<sup>てん</sup>天皇<sup>てんこう</sup>陛下<sup>へい</sup>の<sup>の</sup>廿六日<sup>にじゅうろくにち</sup>嶋津<sup>しまづ</sup>父子<sup>ふし</sup>へ<sup>へ</sup>勅使<sup>ちやくし</sup>として<sup>して</sup>柳原<sup>やなぎはら</sup>公<sup>こう</sup>と<sup>と</sup>差遺<sup>さしゆい</sup>され<sup>る</sup>花房<sup>はなぼう</sup>公<sup>こう</sup>之<sup>の</sup>不<sup>ふ</sup>隨行<sup>ずいぎやう</sup>龍驤<sup>りゆうせう</sup>清<sup>せい</sup>輝<sup>き</sup>の<sup>の</sup>兩艦<sup>りやうかん</sup>ふ<sup>ふ</sup>兵士<sup>へいし</sup>三大隊<sup>さんだいたい</sup>并<sup>なら</sup>ふ<sup>ふ</sup>巡查<sup>じゆんさ</sup>五百名<sup>ごひゃくめい</sup>と<sup>と</sup>鹿兒<sup>ろくぎ</sup>

嶋<sup>しま</sup>へ<sup>へ</sup>亦<sup>また</sup>製造<sup>せいぞう</sup>所<sup>しよ</sup>等<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>所分<sup>しよぶん</sup>ふ<sup>ふ</sup>付<sup>つ</sup>山田<sup>やまだ</sup>少将<sup>せうしやう</sup>伊東<sup>いとう</sup>少将<sup>せうしやう</sup>等<sup>ら</sup>都合<sup>つごう</sup>十七<sup>じゅうしち</sup>大隊<sup>だいたい</sup>餘<sup>あま</sup>と<sup>と</sup>大炮<sup>だうぱう</sup>三門<sup>さんもん</sup>と<sup>と</sup>以て<sup>も</sup>鹿兒島<sup>ろくぎしま</sup>へ<sup>へ</sup>出張<sup>しやうちやう</sup>一<sup>いつ</sup>戦地<sup>せんち</sup>の<sup>の</sup>様子<sup>ようす</sup>と<sup>と</sup>窺<sup>うかが</sup>ひ<sup>ひ</sup>一<sup>いつ</sup>日<sup>ひ</sup>々<sup>々</sup>の<sup>の</sup>戦争<sup>せんさう</sup>城中<sup>じゆうぢゆう</sup>堅固<sup>けんこ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>常<sup>つね</sup>不<sup>ふ</sup>利<sup>り</sup>あり<sup>り</sup>た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>植木<sup>うゑき</sup>田原<sup>でんげん</sup>の<sup>の</sup>戦<sup>いくさ</sup>あり<sup>り</sup>官<sup>くわん</sup>軍<sup>ぐん</sup>利<sup>り</sup>を<sup>を</sup>失<sup>な</sup>ひ<sup>ひ</sup>暫時<sup>しばらく</sup>苦戦<sup>くせん</sup>ふ<sup>ふ</sup>及<sup>およ</sup>び<sup>び</sup>吉田<sup>きちだ</sup>陸軍<sup>りくぐん</sup>少佐<sup>せうさ</sup>を<sup>を</sup>廿四<sup>にじゅうし</sup>日<sup>ひ</sup>午後<sup>ごご</sup>三時<sup>さんじ</sup>頃<sup>ころ</sup>討死<sup>うちし</sup>する<sup>る</sup>一<sup>いつ</sup>官軍<sup>くわんぐん</sup>一<sup>いつ</sup>先南<sup>せんなん</sup>の<sup>の</sup>関<sup>せき</sup>迄<sup>まで</sup>引揚<sup>ひきあげ</sup>山鹿<sup>やましか</sup>の<sup>の</sup>官兵<sup>くわんべい</sup>と<sup>と</sup>合<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>始<sup>はじ</sup>め<sup>め</sup>と<sup>と</sup>進軍<sup>しんぐん</sup>一<sup>いつ</sup>賊兵<sup>ぞくへい</sup>ハ<sup>ハ</sup>大軍<sup>だいくん</sup>ふ<sup>ふ</sup>驚<sup>おどろ</sup>き<sup>き</sup>退陣<sup>たいしん</sup>せ<sup>せ</sup>一<sup>いつ</sup>と<sup>と</sup>翌<sup>あした</sup>廿五日<sup>にじゅうごにち</sup>の<sup>の</sup>夜<sup>よ</sup>三好<sup>さんこう</sup>

野津のづの両将りやうしやうハ第一第二だいいちだいにの旅團りよだんを率ひきおて着軍ちやぐんせ  
られ直なみ城中じやうちゆうと策さくと通とト一時いつじ小賊せうそくと掃攘そうじやうせ  
んと充み分ぶんふ其用意そのよういとありたりけるとぞ

西南太平記二編卷之上 終

010190507586

